
石川県立美術館だより

平成13年4月1日発行 第210号



レース・グラス蓋付大杯 ヴェネツィア 16世紀

目次

近代の美術、ガラスの美	2	展覧会回顧（中国文明展）企画展示室 ...	5
常設展示室 主な展示作品	3	平成十二年度 新収蔵品一覧	6
美術館小史・余話（9）.....	3	企画展TOPIC、四月の行事案内他	7
展覧会回顧（平成十二年度開催の展覧会 二）...	4	所蔵品紹介、友の会からのお知らせ他	8

常設展示室 前田育徳会展示室)
 特集
近代の美術
 4月1日(日)~22日(日)

前田育徳会の近代美術品は、油彩画・日本画・彫刻の各ジャンルにわたるものですが、それらの収集の経緯については、以下のように分類されるようです。

まず、前田家第十六代当主(侯爵利為)が、明治四十三年の明治天皇行幸啓にあわせて新築した、本郷邸の装飾用に購入した作品(西洋館には、林忠正所蔵品の内、黒田清輝・野口駿美が仲介した「河岸荷揚所図」や「中市街の風俗図」「洗濯婦図」など)計二十四点の油彩画が購入されました。そして新規に描かされた作品(日本館の橋本雅邦筆「四季山水図襖絵」など)や、利為侯が欧州滞在・出張中に自身で購入した作品。さらに国内において、展覧会で買い上げたり、知人などから購入した名品の数々(「埴保己一像」や「竹取翁」など)。進呈を受けたり記念に贈られたりした作品(「雌雄矮鶏」や「岩に鷹」など)。その他の経緯によるもの(第十五代利嗣侯に嫁した朗姫の持参品「伊国勇士図」など)。そのほか今日収集の経緯が不明の作品、などに分かれるようで、それは利為侯を中心とした前田家の近代史の一面を語っているものともいえましよう。

前田育徳会蔵品は、一般に古文書・典籍に優品が揃えられていることで有名ですが、歴代藩主が美術・文化を育成し文化財を伝えようとした姿勢は、近代にも発揮され、育徳会コレクション全体に近代美術品は彩を添えているものといえましよう。

我が国の近代美術は、西洋美術・文化を中心に、その受容・吸収と、反発・利用といったところの諸相がみられ、外来の新文化に対し、それを吸収・消化し、やがて自分の表現として高めていく過程において、自己と民族のアイデンティティを再確認する時期が度々つかえます。一見、偶然性に拠ったかのような前田家の近代美術品も、時代の激動をくぐり抜けた前田家の歴史と、二十世紀の美術の多様性を語っている様に感じられます。

(北澤 寛 学芸主任)

「ガラスの美」とは何でしょうか。ガラスの特性として透明であること、硬いこと、輝きや透明性が時間を経て容易には損なわれないこと、しかしその反面、衝撃にはもろく、一瞬にして砕け散ってしまうことが挙げられます。こうした特性を総合すると、まずガラスの持つある種の清浄性は、美の重要なポイントであると考えられます。続いて安定や永遠の志向です。人類が黄金や寶石に普遍的な価値を認めてきたのは、その光輝の永遠性や、形状の安定性が大きな要因であることは確かです。しかし先にも述べましたように、ガラスの場合は永遠に安定するように見えて、実際は、はかなく砕け散る危険をはらんでいることが、黄金や寶石との根本的な相違点です。

このように、永遠に続くと思いつながら、ある日突然終焉を迎えるというガラスの特質は、人間の生に類似することが出来ます。それゆえ、「ガラスの美」が意味するものは何かといえは、それはまず、「メント・モーリ(ラテン語で「死を忘れるな」という意味)」であると考えられます。

メント・モーリは古今東西の芸術の重要な主題です。美術の分野でまず思い浮かぶのは、十七世紀オランダの「ヴァニタス(はかなさ)」の寓意画です。ここではしばしば、美しい花々の陰に髑髏が描かれており、美しい花もやがては朽ちてしまったとえをもつて、人間が現世的な虚栄を追い求めることを戒めています。また日本では、平安時代後期から鎌倉時代初期の「九相詩絵巻」に、この主題がより生々しく描かれています。

今回は、紀元前三世紀から二十世紀にかけての様々な地域のガラス作品を展示します。人間の有限性に対する自覚への促しという共通の文化的基盤が、時代や地域によりどのように解釈され、どのように様式化されたのか。ほんの一端をご紹介したいと思います。

(村瀬博春 学芸主任)



铸造ガラス尖底鉢 ヨルダン B.C.3~2世紀

常設展示室 第2展示室)
 特集
ガラスの美
 4月1日(日)~22日(日)

常設展示室

主な展示作品

4月1日(日)~22日(日)

● = 国宝 = 重要文化財
○ = 石川県指定文化財



●色絵雄香炉(右) 色絵雌雄香炉(左)
野々村仁清

前田育徳会展示室

特集 近代の美術

洗濯婦図

河岸荷揚所図

伊国勇士図

面のある静物

秋景山水図

静峽時雨図

梅見茶屋

塙保己一

ウジェーヌ・ブーダン

アルマン・ギョーマン

百武兼行

松村 巽

橋本雅邦

山元春拳

滴木清方

島田墨仙

第1展示室

●色絵雄香炉

色絵雌雄香

野々村仁清

野々村仁清

第2展示室(古美術)

古九谷

色絵鯉藻文平鉢

色絵壺割花鳥図平鉢

青手樹木図平鉢

特集 ガラスの美

白地黒被花唐草文瓶

铸造ガラス尖底鉢

ゴールドサンドイッチグラス狩獵文杯

シユバルツロット動物文杯

黒幾何字文リキユールセット

第3~6展示室は、四月二十二日(日)まで第57回現代美術展会場となっております。通常の展示は四月十七日(金)からですが、次号でご案内いたします。

観覧料(特別陳列を含む)

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		



ゴールドサンドイッチグラス狩獵文杯
ボヘミア 1730年頃



白地黒被花唐草文瓶
中国清時代 18世紀



色絵石畳双鳳文平鉢
江戸 17世紀

美術館小史・余話

9

嶋崎 丞すむ 当館館長

昭和三十四年十月に開館した旧石川県美術館は、第二次世界大戦後に県立として鉄筋コンクリート造りの本格的美術館としては、最も早い時期に建設されたものの一つである。戦後の未だ経済的に豊かでない時代に、県財政をなげうつての建設であつただけに、当時の田谷知事の思い入れは深く、そこで美術館の所管は、知事部局の企画県民課に置くこととなつた。

美術館を利用する一般の人々にとっては、博物館法という法律の存在は、ほとんど無関係であるが、美術館や博物館を設置する者にとっては、この法律の規制を受けるので、その存在は非常に重要なことであつた。博物館は、戦後日本で新しく生まれた社会教育の一つの機関として位置付けられ、特に地方公共団体が設置する博物館は、教育委員会の所管に属しなければならぬことが、博物館法の第十八条に明記されている。従つて新設された美術館が、知事部局の所管であるといふことで、正式な「登録博物館」として指定されず、「博物館に相当する施設」ということになつた。「登録博物館」と「相当する施設」との本質的な違いはどこにあるかといふことになるが、表面上の活動においては何ら変わるところがほとんどないが、学校教育や社会教育が、政治的介入を防止する上で、戦後、教育委員会が設置されてその所管となつたと同様に、社会教育機関としての博物館に対しても、そうした配慮がなされたのであろう。登録博物館に指定されなかつたことは、石川県や私共職員にとつては、いささかショックであつた。

旧石川県美術館と博物館法


 展覧会回顧

平成十二年度開催の展覧会(一)

一階企画展示室で催された当館主催の特別展は、前号で紹介したように二回を数え、報道機関主催による大型の国際的規模の展覧会も二回でした。

九月に開催された「ベルギー絵画 20世紀の巨匠展 クノッッフ・アンソール・マグリット・デルボオー」は、ヨーロッパにおいて、独自の個性豊かな絵画世界を展開するベルギー絵画の十九世紀末から現代までの四十三名に焦点を当てた展覧会でした。

先駆的な役割を果たしたクノッッフやアンソールはもとより、それにも増してマグリットやデルボオーなどの魔術的、夢幻的ともいえる作品の数々が人気を博し、鑑賞者は魅了されていました。

年が明け、一月中旬から二月中旬にかけて開催された「世界四大文明 中国文明展」は、世界初公開の唐代壁画や三星堆の青銅器、秦の始皇帝兵马俑など、中国各地の三十機関から出品された中身の濃い内容で、青銅器を始め漆器、金銀・玉器、石像彫刻など、百二十件の公開でした。

開始当初はあいにくの豪雪のため足がにぶり、そのため後半にかけ集中的に入場者があり、大変混雑する盛況ぶりでした。

二階の常設展示室での特別陳列や特集は三十回を数えました。

まず古美術部門の中で、前田育徳会展示室で開催された「前田綱紀のノート 桑華字苑と桑華書志」は、五代藩主前田綱紀が座右に置き、折りに触れ書き綴ったという「桑華字苑」と「桑華書志」を中心に、ほか「鷹狩図」や「流鏑馬図」などの絵巻と文房具を展示した内容でした。桑華字苑は辞典的性格で、主に文字や語彙について、それに対し桑華書志は図書につ

いて書かれ、綱紀収集や借用の図書類の来歴や由来を知ることができ、その意味でも興味深げに見入る方々の姿が目立ちました。

同室での「前田家 名物裂の精華」は、例年のテーマですが、金襴や金紗・緞子・錦・綾織・間道・モールなど、名物裂の宝庫といわれる前田育徳会蔵品ならではの内容でした。

多くは台紙貼の状態ですが、それでも今回特別に公開された「一重蔓大牡丹唐草文様金紗」や「花唐草段文様銀モール」などは、反物としての形状を留め、舶載された当時を彷彿とさせるすばらしいもので、女性ファンを中心とした人達の話題ともなりました。

同室の「加賀藩の美術工芸」も例年のテーマでしたが、重文「アエナス物語図毛壁掛」や名物裂の数々、重文「劔太刀 附平緒」、重文「扇面散詩絵手箱」などの収集品、加賀象嵌の鏡、二代五十嵐道甫作と伝える「黒塗布目引出絵替絵具筆筒」、清水九兵衛作「真鳥羽入筆筒」、「桃花美人図染幅」、狩野探幽筆「達磨渡江図」、岸駒筆「松下飲虎図」といった加賀藩が育んだゆかりの美術工芸品など、層の厚い見応えある逸品が公開され、鑑賞者の目を惹きました。

また新春を飾った「前田家 唐物への憧れ」は、歴代藩主が憧れたり、また明治以後の前田家当主の収集になる唐物に焦点を絞ったものでした。

中でも江戸時代の文政元年(一八一八)に宮崎県の串間市の石棺より出土した中国戦国時代の径が三十三・三センチを計る「穀璧」は、法量的にこれだけ大きいものは中国でも聞かず、専門家が見てもビックリするものでした。また五代藩主前田綱紀の収書の重文「重広会史」や重文「世説新語・世説叙録」、前田家十六代利為公が集めた重文「馬郎婦觀音像」、そのほか文房具や漆器、陶磁器、名物裂などの公開でした。

第2展示室の「古九谷・再興九谷名品展」は、江戸時代前期の古九谷から江戸時代後期の再興九谷諸窯までを一室に展示し、九谷焼の流れが学習できるよう

意図し開催しました。館蔵品に加え、寄託品を数多く展示したため、九谷ファンの方々から好評を得ました。

「芭蕉翁の頭陀袋と俳画」は、「芭蕉、奥の細道と加賀」、「芭蕉の門人達と俳画」、「女流俳諧の世界」の柱で構成されました。今回衆目の的となりましたのが、元禄二年(一六八九)、奥の細道行脚の旅の帰路、金沢に立ち寄ったときに遭った「頭陀袋」で、芭蕉が直に身に付けていただけに感慨深いものでした。

「文化財保護法50年記念 石川県の名宝 国宝・重文・県文」は、館蔵品・寄託品の中から指定文化財四十二点を公開したもので、展示スペースの関係上、前期・後期で展示替えを行いました。

近現代部門の「2000 石川県作家選抜美術展 平面」は、昨年の工芸部門に続き、日本画と洋画の二十から四十代の気鋭の作家を選抜し、九作家四十六点を展示したものでした。意欲的な意気込みが窺われる代表作が展示され、各作家の個性が競い合いました。

「戦後工芸の展開(2) 石川の昭和30年代」は、「石川の昭和20年代」に続く、シリーズ第二回目の企画でした。戦後の混乱がやや薄れ、重要無形文化財保持者の認定開始や日展の再編成など、この昭和三十年代は工芸界において重要な出来事であった時期で、作家同士が緊張を生み、多くの秀作が発表されています。その状況の一端を三十八名四十九点の作品で紹介したもので、時代の背景が作品によく表れ、その意味でも現代を見つめる格好の機会でした。

「彫刻家 石田康夫の世界」は、石川を代表する彫刻家の一人で、日展で活躍する氏の四十五年にわたる制作活動を振り返る展覧会でした。初期から今日までを通じて、そのほとんどが量感に富む裸婦像が中心ですが、それは石田スタイルとでもいうべき写実を基軸に、肉体の内部から湧き上がってくる深遠な生命力が感じられ、氏の実直な人間性が投影されたものといえましょう。

(北 春千代 学芸第一課長)



第8展示室

世界四大文明 中国文明展

二十一世紀に入って最初の企画展として開催された「中国文明展」は、NHKが放送を開始してから七十五周年を記念して、世界四大文明（エジプト・メソポタミア・インドス・中国）の一つとして開催されたものを、NHK金沢放送局の放送開始七十周年を記念する事業として、当館で巡回開催したものでした。昨年の四大文明展同時立ち上げの頃より、NHKの情報網を駆使して、徹底した広報活動が実施されていたことも手伝って、一月から二月にかけての、北陸では最も気候条件の悪い時期で、しかも特に本年は一月中旬、豪雪に見舞われたにもかかわらず、この時期としては七万八千七十九名という大変な数の鑑賞者がありました。

当館では新館を開館してから、昭和六十一年の「黄河文明展」、平成二年の「南京博物院名宝展」、平成五年の「北京故宫博物院展」、平成十一年の「兵馬俑と秦・漢帝国の至宝」、そして今回の「中国文明展」と五回にわたって、中国の文物を紹介する企画展を開催してきましたが、そのいずれの展覧も大成功を収めています。それほどまでに中国の歴史や文化に対して、日本人は深い関心を寄せているということができると思われます。

一九六〇年代後半頃より、中国では古代文物の発掘調査が急激に進み、次々と新しい研究成果が発表され、一部歴史を塗り変えるような発見もあり、その一つが一九七四年春の「始皇帝兵馬俑群」の発見であるといわ

れています。こうした意味で、最近の中国文物展の主流は、発掘品の成果を中心とする中国古代文明展であり、それらに見るべきものがあるということができません。今回開催された「中国文明展」も、その中心をなすものは、いうまでもなくここ三十年ほどの発掘成果を基本とした、中国古代六千年の悠久の歴史を跡付けた大掛かりの展覧内容となっていました。

展覧の企画構成で見ると、昭和六十一年の「黄河文明展」とほぼ内容を同じくしていますが、前回是中国古代文明の発祥地を黄河周辺に限定しているのに対し、今回はその後の発掘調査研究から、長江周辺の地域にまで、中国古代文明発祥の地域を広げているのが一つの見所でした。そして前回では展示されなかった、一九八六年以降発掘の新資料が三十一一点も展示されているところが見事でした。また中国の博物館では公開されてはいますが、今回の唐時代の古墳内部の壁画を含めて、日本での初公開の作品が二十余点を越えているのも、高い評価を受けた理由につながったものと思われまます。

しかし一方では、昨年度の「兵馬俑と秦・漢帝国の至宝」や、その他の展覧にも幾度か展示されたり、同類のものが展示されたりしたものが三十九点あり、あれだけ膨大な発掘資料を保管する中国においても、歴史を語る貴重な文物となると、極めて限定されてくるということが、当館で開催した過去五回の展覧を通じてみても理解することができたように思います。

そうした作品の中で、私の心を捉えて放さない作品は、「黄河文明展」にも展示された「絵彩陶伎楽座傭」で、十五年振りの対面でした。隋時代の作品ですが、法隆寺金堂天蓋に附属する木彫の飛天や、平等院阿彌陀堂内部長押上の小壁に懸けられた、楽器を奏でる菩薩像の源流に通ずるものがあり、音楽の響きが聞こえてくるような思いで鑑賞しました。

いずれにせよ、中国文明の発祥から、文物の展示を通して年代別に整然と区分し、適当な解説と映像を交えてのNHKらしい展示構成は、中国六千年の歴史を見事に浮き彫りにし、高い評価を受けた展覧でした。

今度の展覧は、NHKの電波を通して広報活動が徹底して行われた関係から、広く北陸三県から多くの入館者を迎えることができました。情報の持つ重要さをつくづくと感じさせられた展覧でした。そして多く集まって来られた方々が、美術館周辺の施設や商店街にも足を運ばれたようで、文化が地域にそれなりの影響を与えたり役割を持つことを示してくれた展覧でもありました。二十一世紀は文化の時代の始まりともいわれています。本年は都市緑化フェア、来年は大河ドラマ「利家とまつ」に関連した大型企画が次々と開催される予定になっています。どうぞ美術館へ足を運んで、楽しんでいただければと思っています。

(嶋崎 丞 館長)

企画展示室

第57回現代美術展

四月七日(土)～二十二日(日)

(第3～9展示室)

日本画、洋画、彫刻、工芸、書、写真の六部門の公募展です。委嘱出品作品と、一般応募の入選作品約九百点を一堂のもとに展示いたします。

入場料

一般八〇〇円 大高生六〇〇円 中小生五〇〇円

団体料金は各二〇〇円引

当館友の会会員は会員証提示により団体料金
連絡先 金沢市香林坊一五 一

北國新聞社事業局内 (財)石川県美術文化協会

☎〇七六 二六〇 三五八一

平成12年度 新収蔵品一覽

平成十二年度の新収蔵品は、寄贈二十九点、購入十一点、組替一点、計五十点となりました。ご寄贈を賜りました各位に対し、改めて感謝の意を表します。また今後とも皆様の一層のご協力をお願いいたします。

平成十三年三月三十一日現在の収蔵品総数は二千六百三十四点です。
(「重要美術品」)

- 一 陶磁
 - 黒茶盃 銘大黒 九代大樋長左衛門作 坂井小登栄氏寄附
 - 海老耳端反水指 九代大樋長左衛門作 坂井小登栄氏寄附
 - 三人形蓋置 九代大樋長左衛門作 坂井小登栄氏寄附
 - 渦紋筒水指 大樋長左衛門(年朗)作 坂井小登栄氏寄附
 - 細字阿弥陀経十六羅漢画茶碗 田村金星作 坂井小登栄氏寄附
 - 細字酒坏 田村金星作 坂井小登栄氏寄附
 - 萌黄釉裏金彩齒文鉢 竹田有恒作 竹田きよ氏寄附
 - 千字文焼酎呑 野村善吉作 野村善吉作
 - 淡青釉裏銀彩壺 中田一於作 福島武山作
 - 赤絵壺「かざはな」 福島武山作 柴田博作
 - 銀彩魚紋ノ図 柴田博作
 - 二 漆工
 - 漆皮盤 新村撰吉作
 - 三 染色
 - 遊童図 木村雨山作 木村外紀男氏寄附
 - 結城紬観世水に水玉文着物 坂井小登栄氏寄附
 - 加賀友禅染牛首袖 坂井小登栄氏寄附
 - 友禅訪問着「幽蘭」 吉岡小百合作
 - 友禅訪問着「秋裳」 田丸幸子作
 - 四 金工・刀剣
 - 太刀 銘一 景安作 大友恵美子氏寄附
 - 短刀 無銘正宗 正宗作 大友恵美子氏寄附

- 短刀 銘国光 新藤五国光 大友恵美子氏寄附
- 短刀 無銘義弘 郷義弘作 大友恵美子氏寄附
- 脇指 無銘近景 近景作 大友恵美子氏寄附
- 刀 無銘家次 家次作 大友恵美子氏寄附
- 脇指 銘賀州住兼若 延宝七年八月吉日 大友恵美子氏寄附
- 脇指 銘越中高岳住清光作 号大日 三代辻村兼若作 大友恵美子氏寄附
- 刀絵図 清光作 大友恵美子氏寄附
- 五 日本画
 - 生々 仁志出龍司筆 仁志出龍司氏寄附
 - 二人 中村徹筆 中村徹氏寄附
 - 貌 中村徹筆 中村徹氏寄附
 - 三人の刻 中村徹筆 中村徹氏寄附
 - 午後 中出信昭筆 中出信昭氏寄附
 - 遙か 中出信昭筆 中出信昭氏寄附
 - 富士巻狩図 大友恵美子氏寄附
 - 山水図 玉井紅嶺筆
 - 日の出図 玉井紅嶺筆
 - 大楠公・義貞公誠忠之図 久保田米僊筆
 - 視 中村徹筆
 - 六 油彩画
 - 風船とヒエ口 鈴木博筆 鈴木博氏寄附
 - ロッシュ展望 田辺栄次郎筆 田辺多鶴子氏寄附
 - 虚飾 中村静勇筆 中村静勇氏寄附
 - 赤い印象 中村静勇筆 中村静勇氏寄附
 - 荒野に咲く 中村静勇筆 中村静勇氏寄附
 - 蜘蛛の糸 鴨居玲筆
 - 七 彫塑
 - 古代への想い 石田康夫作 石田康夫氏寄附
 - 孤影 石田康夫作 石田康夫氏寄附
 - 昇華 石田康夫作 石田康夫氏寄附
 - 海 石田康夫作 石田康夫氏寄附
 - 吉田次太郎像 吉田三郎作 吉田玉子氏寄附
 - 八 その他
 - 二俣和紙染帯 坂本宗一郎作 坂井小登栄氏寄附
 - 截金彩色合子「花守犬」 西出大三作



太刀 銘一 景安

孤影 石田康夫



海老耳端反水指 九代大樋長左衛門



結城紬観世水に水玉文着物



萌黄釉裏金彩齒文鉢 竹田有恒



漆皮盤 新村撰吉



遊童図 木村雨山



荒野に咲く 中村静勇



ロッシュ展望 田辺栄次郎



三人の刻 中村徹



遙か 中出信昭



西部緑地公園陸上競技場前の風景

企画展TOPIC

街中に見る吉田二郎

吉田二郎は芸術院会員や日展常務理事として活躍を続け、石川県の彫刻界を代表する作家でした。当館にもご遺族から寄贈いただいた作品など五十点が収蔵されています。しかしながら、没後四十年を経た今日となつては、県内でもあまり知られていないことはやむを得ないのかもしれない。ところが金沢市内には数多くの作品が残っており、作者の名は知らずとも、作品に見覚えがある方は大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。

その中で最も親しまれていたのが杜若（前号に写真掲載）でした。JR金沢駅の現在の東口、かつての駅の正面に交差点を見下ろすように立っていた像です。現在はバスターミナルの工事のため、撤去されていますが、加賀宝生の古里として金沢を象徴する作品でした。

記念像や肖像彫刻が多く残されており、旧第四高等学校（現在の石川近代文学館）前庭には、四高記念碑があります。また吉田の出身校である石川県立工業高校には、初代校長納富介次郎像、師の青木外吉像が設置されています。

戦前の作品では、昭和五年建立の前田慶寧公の像が知られています。加越能維新勤王家表彰事業として、兼六園は現在の成巽閣東北の場所に立てられました。銅像出のため鑄つぶされて今日その姿を見ることができません。

当館の一階ロビーの大空間で、腕を高く上に伸ばす像は、波と題されたモニュメントです。県内では、西部緑地公園陸上競技場にも立っています。噴水の中に立ち、天を指して伸びる姿のこの像は、

平成三年に開かれた「いしかわ国体」の開会式会場の正面を飾るスポーツの象徴として置かれました。日本のスポーツのメッカとされる国立競技場にも、やはりこの像が設置されています。今にも動き出しそうな骨格や筋肉の表現を得意とした、吉田二郎ならではの記念像といえるでしょう。

（谷口 出 学芸専門員）

講演会、父 吉田二郎を語る（講師・吉田渉氏）は四月二十九日（日）に開催します。

次回の展覧会

企画展 彫刻家 吉田二郎展

四月二十八日（土）～五月二十七日（日）

（第7～9展示室）

特集 名物裂と香道具

四月二十七日（金）～五月二十七日（日）

（前田育徳会展示室）

特集 茶道美術名品展

四月二十七日（金）～五月二十七日（日）

（第2展示室）

各地の展覧会

四月

開催日程 休館日、内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

よみがえる日本画 1 伝統と継承・2000年の知恵 4/26～6/10

東京藝術大学大学院美術館（東京都台東区・〇三 五六八五 七七五五）

国宝醍醐寺展 4/3～5/13

東京国立博物館平成館（東京都台東区・〇三 三八三二 一一一一）

色彩の歓び メルツバツハー・コレクション展 4/13～5/27

愛知県美術館（名古屋市中区・〇五二 一九七一 五五一一）

特別展 小倉遊亀 4/21～5/27

滋賀県立近代美術館（大津市・〇七七 五四三二 二二一一）

最後の天才浮世絵師 月岡芳年展 4/15まで

京都府京都文化博物館（京都市中京区・〇七五 二二三二 〇八八八）

菅原道真公二〇〇年祭記念 北野天満宮神宝展 4/10～5/13

京都国立博物館（京都市東山区・〇七五 五四一一 二二一一）

世界四大文明 中国文明展 4/12～6/17

広島県立美術館（広島市中区・〇八二 二二二二 六四六六）

四月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
4/1(日)	月例映画会	九谷焼(22分) 輪島塗(30分)	ホール
4/8(日)	CDコンサート	バッハのカンタータ J.S.バッハ カンタータ第1番「暁の星はいと麗しき」 カンタータ第2番「あお神よ天より見たまえ」(約45分) 指揮 ニコラウス・アーノンクール 演奏 ウィーン・コンツェントゥス・ムジクス他	ホール
4/15(日)	月例映画会	日本の美術工芸 その手わざと美(28分)	ホール
4/22(日)	月例映画会	明治の絵画(22分)	ホール
4/29(日)	講演会	「父 吉田二郎を語る」 講師 吉田 渉氏	ホール

全館休館日は四月二十三日（月）～二十六日（木）です。



牛

安嶋雨晶

明治40年（1907）～昭和48年（1973）

昭和 20世紀

縦147.9 横164.4 (cm)

杭につながれた子牛が、飼葉を食べていると、どこからともなく黄色い蝶がひらひらと舞ってききました。その気配に子牛が振り返ります。こうした何気ない日常の一コマを、巧みに絵画化したのがこの作品です。

背景を省略し画面を構成するモチーフも、よけいな夾雑物を取り除き、作者は必要最小限の素材を使って主題を簡潔に表現しました。子牛は、そのうぶな毛並みや、体と足のバランスにあらわれる特徴が、作者の鋭い観察によって巧みに把握されており、生涯、牛や馬を描き続けた作者の真骨頂が見て取れます。また、牛の顔と蝶を結ぶ左下がりの線、牛の胴体に見られる左上がりの線、右端の杭の垂直線、これらが絶妙のバランスを保って画面を構成しているのがわかります。

一方、この画面に漂う、現代の慌ただしい生活の中では滅多に味わうこともできない、のどかな春の気分は、自然や生き物をたえず優しい眼差しのうちにとらえた作者の温かな気性と相まって、見る者に郷愁を抱かさずにはおきません。そこには、北原白秋や野口雨情にひかれ詩作も試みた作者の、詩人としての一面が反映されているといえます。

安嶋雨晶は、石川県松任市に生まれました。広田百豊、西山翠嶂に師事。京都市立絵画専門学校に学んでいます。金城画壇展、日本自由画壇展、文展鑑査展等で受賞し、戦後は日展を中心に活動を続けました。

（西田孝司 学芸主査）

友の会からのお知らせ

920-0963
金沢市出羽町2-1

石川県美様 2001-1501

92009630001501

会員番号
会員証裏面左上の番号と同じ
ものです。会員期間中の変更
はありません。

居住地区別番号
転居などで変わる場合もあ
ります。

郵便番号バーコード

このたびは友の会へご入会下さいましてありがとうございます。会員の皆様のお手許にはこの『美術館だより』を毎月お送りいたしますが、送付封筒表宛先ラベルは上記のようになっております。記載事項に誤りまたは今後変更などがございましたら、お手数でも一報下さいませようお願いします。また会員証提示による入館料割引は、石川県立歴史博物館、石川県七尾美術館、石川県輪島漆芸美術館でも受けることができます。いずれも各館主催展覧会に限りますが、お出掛けの際にはどうぞご利用下さい。

「彫刻家 吉田三郎展」関連行事

講演会 聴講無料

演題 「父 吉田三郎を語る」

講師 吉田 渉氏

日時 四月二十九日(日)午後一時三十分

会場 当館ホール

休館日

四月二十三日(月)～二十六日(木)

石川県立美術館だより

第二一〇号 平成十三年四月一日発行

〒九二〇〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(一三三)七五八〇

FAX 〇七六(一三四)九五五〇